

けられている。

宮参りを歌う子守唄は、近畿地方や中国地方にしばしば見られる。この作品では、子の健やかな成長を祈る親の愛情を思わせるような、繊細にして大らかな和声の子守唄に与えられている。

◆松下耕：信じる

作曲家で合唱指揮者としても活躍している松下耕（1962-）の作品で、詩は谷川俊太郎（1931-）による。そもそもは第71回NHK全国学校音楽コンクール（2004年）中学校の部の課題曲として書き下ろされたが、好評を得てその後も様々な場で歌い継がれている。この曲には混声3部合唱の版と女声3部合唱の版が存在するが（いずれもピアノ伴奏付き）、本日は後者が演奏される。

谷川の詩は3節に分かれており、それぞれ「私」「あなた」「世界」を信じる気持ちを明らかにする。松下は各節に、歌詞に従って異なった音楽を付けている。このうち第3節では、「世界」を信じる気持ちを歌う背景に、先行する2つの節で歌われた「私」と「あなた」が織り込まれ、両者が「世界」へと統合されていく。「世界」を重んじる態度は、ピアノの前奏や締めくくりのユニゾンが第3節の旋律に基づいていることでも確認される。

解説：生島美紀子

◆大澤壽人《ヴァイオリン コンチェルティーノ 支那詩》

大澤壽人（おおさわ・ひさと、1906/1907-53）は、近来再び注目を集めている作曲家であ

る。1930年に関西学院を卒業後アメリカへ留学。ボストン大学とニュー・イングランド音楽院で学び、高い評価を受ける。その後パリに渡り、ポール・デュカとナディア・ブーランジェの門下に入り、パドルー交響楽団で自作を自ら指揮するなど、1930年代の欧米楽壇で華々しい活動を展開し、日本人音楽家として突出した存在であった。

1936年2月帰国後は、演奏会用大作を創作する一方で、1938年辺りからラジオ放送用に大規模な交声曲や朗読を含む物語詩曲などを発表。戦後は自らポップスオーケストラを組織し、ジャズを取り入れた創作・指揮を手がけ、また多くの映画音楽も担当する活躍ぶりであった。

その多忙な創作・指揮活動と並行して、神戸女学院音楽学部の教壇では音楽理論と作曲を教え、教育活動にもたずさわった。作曲家・指揮者・教育者・プロデューサー…これらの役割をいとも軽々とこなしながら、しかし過密スケジュールのために40歳代後半で急逝したときは、本学現役の教授であった。

《ヴァイオリン コンチェルティーノ 支那詩》は帰国の年に完成し、翌1937年4月に本学同窓会東京支部主催による「大澤壽人作曲指揮交響演奏会」で初演された。新交響楽団（現在NHK交響楽団）の演奏による当夜の音楽会では、《第三交響曲 建国交響曲》も初演されており、帰朝したばかりの作曲家の意欲が窺われる。

《支那詩》は好評を博し、8ヶ月後には大阪で再演された。当時のプログラムによれば、この作品は「大澤氏が支那の音楽に関する書物を読んでいるとき、拾い上げた一つの旋律を中心に作曲」されたという。続く作品解説には、以

下のように記されている。

第1楽章 アレグロ・モデラート：第1主題はヴァイオリン独奏によって奏され、伴奏部の管弦楽と交互に展開していく。第2主題はリズムミッくな伴奏に対照する静かな旋律で、ごく短い展開部が現れる。

第2楽章 クァジ・アダージョ：諧謔的な即興曲である。一夜香港の裏町で聞いた街の音楽師の印象が、かすかに含まれている。

第3楽章 ラルゲット：ゆっくりしたイントロダクションの後、速くて軽い気分を持ったロンドで終わる。終わり近くヴァイオリン独奏のカデンツァが数度伴奏部と交互に出てくる。

本日は、惜しまれつつ世を去った作曲家の代表作の1つが、初演以来70年を経て、再び聴衆の前に登場する。この稀な機会に際し、自筆譜指定の“Chinese drum”演奏には、正式な支那太鼓を用いる。

なお2006年8月ご長男大澤壽文氏おおさわとしふみから、膨大な遺品資料が神戸女学院に寄贈され、学院の宝となった。「大澤壽人遺作コレクション」と名づけられたこの貴重な資料の中には、創作・編曲作品700曲以上が含まれ、《支那詩》の自筆譜も収められている。コレクション詳細については、本日刊行の『煌きの軌跡—大澤壽人作品資料目録』をご覧いただきたい。